



TITLE:

座古愛子のキリスト教理解と信徒伝道

AUTHOR(S):

岩野, 祐介

CITATION:

岩野, 祐介. 座古愛子のキリスト教理解と信徒伝道. アジア・キリスト教・多元性 2012, 10: 75-89

ISSUE DATE:

2012-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/154769>

RIGHT:

座古愛子のキリスト教理解と信徒伝道

岩 野 祐 介

女性キリスト者座古愛子

座古愛子（1878-1945）は明治期から戦前期にかけて活躍し、当時としてはかなり知られていた信徒伝道者、歌人・詩人であったが、現在ではほとんど知られていないようである。¹ この背景には、人物の記録を残すのは主に「指導」を受けた教会員や「弟子」であり、教職者でないものは記録に残りにくいというキリスト教史（研究）の側の問題もあるように思われる。座古は複数の著書（文献表参照）がありながら、その後は知られない存在となってしまったのである。しかし、座古の生涯²には、様々な信徒伝道のあり方が見られて興味深い。

座古は幼少期に複雑な家庭環境と貧困のために、さらに青年期以降には病（悪性のリウマチ）のため寝たきりとなり、苦難に満ちた生活を送った人物である。しかしキリスト教との出会いを通して救済体験をし、後には神戸女学院に住み込んで祈祷会を主催し、また文書、手紙、訪問等を通しての伝道、そして同様に病に苦しむ人々のための祈りの活動へと至った人物なのである。

座古愛子について改めて知る意義

従来日本キリスト教史の主な研究対象は、教派教会の歴史とそこでの指導者の移り変わり、そして彼等の思想とその歴史であった。しかし、教会、キリスト教共同体の内実は、牧師や指導者について知るだけでは明らかにならない。当然のことながら、教会や共同体は牧師・指導者だけで成立するわけではないからである。信徒の側のことを知ることにもまた、重要である。³ また、指導者による説教集やエッセイ等が残っていても、それを聞く側がどう聞いていたのか、読む側がどう読んでいたのか、ということについては必ずしも明らかではない。というのも、指導者のキリスト教理解が信徒のそれと重なるとも限らないからである。⁴

ここに表れているのは、大げさに言えばキリスト教（信仰）の主体は誰なのか、という問題である。それは当然指導者だけではない。伝道・宣教の主体は誰か、ということについても同様である。しかし、従来日本のプロテスタント・キリスト教では、もっぱら牧師や宣教師のテーマとして考えられてきた面があるのである。⁵

もちろん、牧師や教会の指導者以外による伝道や宣教の試みがなされていないわけではない。しかし、固定的で一定以上の規模をもつ組織でなければ細かい記録が残らないため、それらが後の時代に伝わりにくい面があるのは確かではないであろうか。例えば学生YMCAで行われている聖書研究会のような試みは（それが伝道・宣教の枠内に入るかどうかは別として）学生YMCAの枠外ではほとんど知られていないように思われる。そしてそのように知られることがなければ、広がりも持ち得ないのである。教会の祈祷会のような行いは、一般的には礼拝を補完するものと考えられがちである。後述のように座古は独自の祈祷会を開いていたが、それは教会の礼拝を補完するという意図のものではないように思われる。座古は教会員であり、内村鑑三と交流があった⁶ものの、無教会主義に賛同して活動していたわけではない。とはいえ彼女の活動は教派性を越えており（病という共通項により教派性を越えている）、また自分の存在を通して聖書を読もうとしている点、信徒伝道という点、等において無教会主義とも重なり得るものである。

座古のキリスト教理解

座古は 20 歳の頃キリスト教と出会い（幼少時に祖母から聖書物語等を聞かされていたので、再会とも言える）、救いを得た。この、座古が得た救いとは、第一には孤独からの解放であり、そして自らの存在・病への意味づけであったと考えられる。座古は、病身ということは変わらないが、内面的に全く変わったと述べている。すなわち、病気が治るか治らないか、ではなく、病身のまま、その病身であることへの新しい意味付けを得るという逆転の発想を座古は得たのである。治らないという自覚はあるが、その病身の自分をそのまま神が用いるという感覚である。

「…全能なる神のいかで我病を癒し能はざることあるべき、されど妾を此儘に置き給ふは必ず深き思召しある事なるべし、」⁷

「身を飾るをたゞ事とし、栄耀栄華を望みて喜びとしたれば全快せば又元の心になりて貴き魂さへも亡ぼすべきを憐み給ひ、斯くて数限りの苦勞を授け空しき世に頼むべきもの無く、肉体の果敢なきものたるを悟らしめ、唯神により頼み真の自由と霊の欣喜をあたへんとて此貧困と疾病とを与へたまへるにこそ、さればこの病は妾に於ける幸福にして聊かも憂ふる事なかるべきなり。」⁸

「癒ゆること必ずしも幸福ならず、癒えざる是はたして不信に非ず、神は愛なり人間に幸福あれとこそ望み給はめ。誰にも災難を与へ給はず。仮に妾若し立所に癒えて満天下に神の全き能を證すとせば必らず蟻の甘きによる如く、人々好奇心に駆られて来るべし、そのはていかに難病者は肉の癒やされんが為に信者となるべきも、

若し癒えざる時は以前に数倍したる失望落膽をし、昨日迄熱心に祈祷せし口を以て今日はキリスト教を罵り汚すに至らん。」⁹

そして座古は、同じように病に苦しむ人々を励まし、慰めるのである。

「逆境に在る者精神の痺れぬかぎりは煩悶あり。煩悶せよ煩悶せよ但し煩悶を其まゝに止むるは自暴自棄に陥る恐れあり。煩悶を中止するは危険なり。煩悶より解脱する迄煩悶を続けて健気なれとも友は必ず此解脱によりて早晩何かの主義の為に全霊全身を捧げて倒れて後止む迄盡さざる可し」(病友についての言葉)¹⁰

「…妾は未だ世に負ふところありてか、神は世に置き給ふ。天父よ此癱物に何をなさ給ふか。『爾曹の召されたる召にかなひて行はん事を』オー然るか妾は病人にて召されたり、故にまた病める同胞を愛せば汝は足れりと宣給ふか、…」(入院患者の死に接しての言葉)¹¹

なお、座古のキリスト教的文章において、三一論、聖霊論、キリスト論、といった教義的な話題はほとんど扱われない。神に関しては、もっぱら救い主としての「神」「主」として捉えられている。また、内村鑑三の再臨運動に共感するような感覚の持ち主であった。

罪の問題

日本のプロテスタント・キリスト教史において、信仰理解をめぐるしばしば問題とされてきたのが罪の問題、罪の自覚と贖罪理解の問題である。それでは、座古はこの罪の問題をいかに捉えていただろうか。

貧困、病苦の中に長い時間をすごした座古においては、罪は飲酒など具体的な行いと直結して理解されており、内村のような「罪とは自己中心性である」といった抽象的な議論はあまり見られない。座古は当初、罪・贖罪ということがわからなかったというが、聖書を読むうちに理解したという。

「奥江様申さるゝ様人は皆罪を犯したるものなればこれまでの悪しかりしと思ふ事は悉く神のみ前に白して悔い改めねばならぬなりと、されど妾は自己の罪あることを覚らざりしをもて神を信ずる念はあれど罪を悔ゆる思ひあらざりしが猶ほ読み且つ考ふるうち、聖書は次第に光を放ちて神の恵み基督の愛を知らしむると共に我罪科をも覚ふるに至り、…如何にせば宥さるべきやと泪ながらに神のみ前に詫ぶる思ひはすれどなかなか赦されたりと自ら覚ふる思ひはせず、…」¹²

「…悔い改めて信じなば凡ての罪は赦さるゝなりと信じてやゝ安堵の思ひせり。」¹³

これについて小川修は「十字架につけられし人 座古愛子覚書」の中で、次のように述べている。

「…パウロでは、罪の自覚はあくまで罪の自覚であって、罪の自覚やそれをもたらす律法が、人を義や罪の赦しに導くことはない。しかし、愛子にとっては、…罪自覚的な「旧き人間」から「新しき人間」へ、ローマ書 7 章の「わたし」から同 8 章の「キリスト・イエスの中にある者」へ、の転換は早かった。」¹⁴

「苛酷この上もない現実、すなわち、十字架を背負うことによって、「キリストの〈まこと〉によって」生かされ、「キリストの中に」あったのである。ただそのときは、神の義がそこに示されてはいても、罪の故にそれと気づかず（204:3f.）、受け容れようとしなかっただけである。」¹⁵

ここで小川は、特に日本のプロテスタント・キリスト教の問題として、救いとは罪からの救いであるということを強調し罪とその自覚を重視する結果、罪の自覚の段階からなかなか抜け出せなくなってしまう、ということを指摘したうえで、座古がキリストの中にある者へと進む鮮やかさを評価している。

一方で座古のキリスト教受容については、罪の問題という視点からだけでなく、不条理な苦難をどう受け入れるか、という側面から捉えることも重要であるように筆者は考える。内村のような罪を自己中心性にとらえる理解では、自分で自分の罪を自覚する場合、その罪の原因の一端は自分にある（にもかかわらず、自分ではそれをどうにもできない）もの、すなわち自己愛や高慢さ、怒り（自分から他への怒り、自分から自分への怒り）、等であることになる。しかし、自己中心性といった問題に先立って貧困や病苦といった苦難の中にある座古の場合、救済を罪のゆるしという点のみにおいて考えるだけでは、そのキリスト教理解を説明仕切れないのではないだろうか。座古は絶望しかけたことを罪として捉えてはいる。しかし座古の問題は、罪というよりも、具体的な苦難であった。座古は治癒を得たわけではない。座古が得た救いは、貧困や病のため自分では全くどうしようもないという状態、自己中心性というよりも、中心が何もないような苦しみからの救いなのである。

座古と信徒伝道

座古にはじめてキリスト教を紹介したのは、祖母であった。

「…祖母は遂に盲目となりて、不自由なる身の子を守り育つる辛勞の中ながら神を信じ居ませる幸には心に絶えず喜びと平安を以て楽しみ給ひけん、妾を抱きては賛美を歌ひまた聖書のことを話し聞かせ給ふ、」¹⁶

その祖母をキリスト教へ招いたのは商売相手の婦人であったという。

「其頃祖母は、小あきなひに出てゐましたが、お得意さまの奥様から、基督教をきゝました。」¹⁷

「奥様の導きによつてキリスト教の講義所で教へられて、八人の受洗者が出来たので、最早講義所では無く「兵庫基督教会」と改称されたのであります。」¹⁸

「(祖母が) しかし三十三ヶ所の、深山幽谷に分け入つたのも決して無駄では無く、嶮岨を辿り、谷底へ下る時、御詠歌を唄ひ乍ら、一番に弥陀の名を呼び奉つた事などは、信仰の土台をすゑるに、深く地を掘り下げた様なものでありましたから…」¹⁹

座古の入信は祖母の導きと、(平) 信徒奥江との出会いとによるものであり、信徒から信徒への伝道のはたらきの結果である。座古もまた信徒伝道へと向かうが、そのきっかけは洗礼を受けて一年後、キリストの夢を見たことであった。

「妾受洗後一年ばかりきさらぎのはじめつ方妾深く眠り居たるに主の十字架にかゝり居たまふみ姿をさやかに夢みたり、み顔は明らかに仰き見る能はさりしが、身の丈高く赤裸々にて首をうなだれ霊は既に天にかへり居るさまなり、兵卒共釘ぬきを持ち来りて手足の釘を抜き抱きおろして下に、置きたりと見たるまでにて覚めたり。」²⁰

これを座古は伝道命令と受け取ったのである。

「これ普通の如き夢にあらで正しく霊夢なるべし、かのペテロが見たりしと云ふまぼろしの如く深き意味のこもれる事ならん」²¹

「思ふにこれたとへ病床にありとても能ふかぎり力を盡して十字架の教を人々に告げよとの事なるか、又は主の御身にも十字架あればいかなる時にも堪へ忍べよとの事ならんかと思ひ、いづれにもせよ大切なることなれば自ら謹しみてさまざまなる思ひの出ることあり」²²

こうして、自らも病床にありながら、同じ病者を慰め福音を伝えるという伝道活動へ

と座古は向かうことになる。

座古の活動

座古はどのような具体的活動を行っていたのだろうか。まず全体的な特徴として、教派を越える要素を持っていることが挙げられる。特に、病気の人から病気の人への伝道、病という共通点により教派性を越えているのである。とはいえ、そもそも伝道とは、自宗教、自教派の枠の外へと向かっている、という意味では教派性を越える行為であるだろう。座古は日本組合教会の兵庫教会会員であるが、組合教会だけでなく、救世軍、日本基督教会、セブンスデーアドベンチスト、メソジスト（関西学院）等と関わりをもつ一方、内村の再臨運動にも共鳴し手紙を送っている。

実践面の重視

座古においては伝道と経済的な働きとが直結している。座古の接する人々には貧しい生活を送るものが多いため、自然、福音伝道と社会的働きとが表裏一体のものとなっているのである。たとえば内村鑑三のような、実践的な働きか、聖書研究か、といった二者択一的な考え方はここからは出てこない。また座古には女性への視点、病者への視点があることも特徴である。座古は禁酒を重視するが、それは禁欲といったことよりも、酒が貧困に由来する問題をさらに悪化させる原因、女性や子どもを苦しめる遠因と捉えられているからである。

活動の手法

座古の具体的活動は、手紙（特定の人物への文書伝道）、執筆活動（不特定の読者への文書伝道）、祈祷会等である。また時折、教会などでいわゆる「証し」を求められることもあった。さらに、個人的な関係の中でも伝道を行なっている（施術中のマッサージ師に、聖書の話をしたり、等）。

座古の祈祷会は、以下のようなものであった。

「一寸面白い集りの様子を申し上げます。神戸女学院の一隅に、学用品販売部、兼私の食堂、兼寝室、兼礼拝堂があると思し召せ。日曜は四五十分間聖書を学びまして、月、火、水、木、金の五日間は、十分か十五分の集りを、午前八時二十分から始めるのであります。集る人は、料理人さんや、小使さんや、女中さんや、臨時雇の婦人やで、八九人であります。何れも未信者で、大師さん凝りや、稲荷さん凝りなどゝ、其他は全く無神論者ともいふべき、靈魂も来世も考へてゐないのと、三種類に別れてゐますから、規則的に出席してはゐるものゝ、耳が塞がつたり、目が

閉じられたり、胸底深く聖語が這入るには、先づ頑固岩から取除かねばなりません。
…」²³

「…鈴が鳴ると皆急いで出て行かれる生徒さん方と入りかはりに、ドヤドヤと僕さん達が集りに見えます。帳面とペンを置くと直ぐ、聖書と讃美を手にして、早速集りを開きます。賛美歌一つうたつて、聖書を少し読み、其一句から教訓を得て、祈捧を捧げて、早是丈で終るので、至極簡単であります。」²⁴

「…一向伝道の仕甲斐が無いと歎きますが、夢現の中にも、微かにきこえた聖語に呼び醒されて、数人揃うて洗礼を受けられた事も度々ありました。」²⁵

このように、ともに聖書を読み、讃美歌を歌い、祈るといった形で行われており、説教や聖書解釈にはさほど力点が置かれていないように思われる。これは、座古が特別な訓練を受けた伝道者ではないこととも関わっているであろう。

信仰的文章

座古は既製のトラクト等を用いることもあった²⁶が、彼女の本領はやはり自身の手による文章にある。現在座古のキリスト教理解を知ることができるのも、彼女が多くの文章を残したからである。逆にいえば、座古が貧しいものへの視点を常に持っていたとはいえ、彼女の伝道は読み書きができて出版物を入手できるものがその対象であったということになる。座古はマスコミの仕組みに乗って活躍していたのである。事実新聞報道により援助が与えられることもあり、「キング」「主婦の友」といった一般の雑誌でも紹介されている。

座古は散文だけでなく、多くの詩文を残している。たとえば「警醒歌」²⁷は、兵庫教会の大挙伝道（1901年と思われる）に際して、武田牧師が座古に作詞を依頼したものである。座古の詩・歌詞は、他にも「福音数え歌」²⁸等で見られるように、天理教の「みかぐらうた」等に共通する庶民的な感覚、平易なことばが用いられているのが特徴である。他に興味深いものとしては、独自の讃美歌の作詞（既成の讃美歌のメロディを用いて歌うことのできる歌詞）がある。座古は讃美歌の影響を強く受けており、文章の中でも賛美歌の歌詞が度々自在に引用されているのである。また、様々な人々を慰問する際も、しばしばともに讃美歌を歌う、ということをしている。他に、和歌、俳句も多数残しており、説教中心のあり方とはまた異なる歌と祈りによるキリスト教表現を示すものと言えるだろう。

一方座古の信仰的エッセイや日記類では、信仰・救済体験を語り、聖書を読み、讃美歌を歌い、祈るといった個人的な伝道に関して記したものが多い。どちらかといえば情緒的であり、論理的あるいは教義説明的ではない。また、聖書は引用にとどめられ、そ

の解釈がされることはあまりない。その代わり、本人を含めた数々の苦悩を脱した人々のエピソードが語られ、それに沿った聖書箇所が引用されている。「簡単に回心しすぎではないか?」、と思わされる話もないではないが、わかりやすく感動的なエピソードの数々が紹介されている。

聖書箇所引用上の特徴

以下では少し、座古による聖書引用の特徴を見ておきたい。

「伏屋の曙」では、53 箇所の聖書引用があり、うちロマ書がもっとも数が多く 12 箇所、以下詩篇 10 箇所、マタイ伝 10 箇所、となっている。²⁹ ロマ書の重視は、座古が罪や贖罪といった問題に悩んだことを反映しているのではないだろうか。また詩篇の引用が数多いことは、詩文に対する感受性の深さを示すものとして興味深い。なおマタイ伝については、共観福音書の代表として引用されているのではないかとと思われる

「伏屋の曙続編」では、61 箇所の聖書引用がある。³⁰ 回数が多いのは、ヨブ記 7 箇所、第一コリント 7 箇所、マタイ伝（他の共観福音書であるかもしれないが、「伏屋の曙」では福音書から引用する場合基本的にマタイ伝から引用していたので、続編でもそれに沿って考えることとした）7 箇所、等である。注目すべきはヨブ記への言及である。これはこの続編において、座古が自らと同じように病気で苦しむ人々について記すことが多いことと関連していると考えられる。

まとめに代えて

以上のような座古の活動とそのキリスト教理解を知ること、牧師・先生中心ではない、(平) 信徒の信仰のあり方を知ること、(平) 信徒伝道のあり方を知ること、また男性・中産階級・インテリ層を主な研究対象としてきた日本キリスト教史を見直す意味で、重要な意味があるのではないだろうか。また、聖書とその解釈、説教中心、そして罪の問題から救済を捉えようとするキリスト教理解に対して、また別の重要な側面を示唆するものであるようにも思われるのである。

文献表

座古愛子の著書

『伏屋の曙』(1906、警醒社) 自伝 97 ページ、韻文 64、短歌 94、俳句 10 ページ

『伏屋の曙 続編』(1908、警醒社) 自伝続編 260 ページ、各種韻文 26 ページ、書簡 10 ページ

『聖翼の蔭』(1913、警醒社) 日記的エッセイ (『旭光』に掲載されたものが主) 158 ページ、韻文 36 ページ、長加部勇吉関連文書 51 ページ

『旭光』: 組合教会の機関紙。1895 より宣教師アッキンソンが刊行。二代目の編集者村上俊吉はもと兵庫教会牧師であった

長加部勇吉: 明治 7 - 30、群馬県碓氷出身、同志社で学んだキリスト者青年。病のため帰郷、柏木義円と交流。弟の長加部寅吉が、座古と交流があったため、勇吉の文章がここに収録されることとなった。なお寅吉は大逆事件の影響を受けて逮捕されたキリスト教社会主義者であるが、座古の言葉にそのような政治的なニュアンスはない。

『父』(1919、警醒社) 養父、座古久兵衛の伝記 内村鑑三が序文を寄せている

『微光』(1925、培文堂) 『教友』誌に連載したエッセイをまとめたもの

『教友』内村鑑三が 1918、再臨運動と連動して刊行開始。中田信蔵、藤井武等が編集に当たる。後中田は見解の相違から内村の聖書研究会からは別れたが、『教友』は中田編集の雑誌として続いた

『闇から光へ』(1931、培文堂) 自伝を改めて書き直したもの (関東大震災で、版元の原稿が失われたため)

『伏屋の曙 (続々編)』(1935、独立堂) 現物未確認、国会図書館他のデータベースより

『事実小説 不知火』(1936、独立堂) 現物未確認、国会図書館他のデータベースより
「めぐみ」第 63 号 (1916、神戸女学院以文会) タルカット師記念号に和歌を寄せている他に、座古自身も雑誌「あけぼの」のち「松籟」と改名、を編集し幅広い読者を獲得していたという

2 次文献、論文等

中村久子『座古愛子女史の一生』(1967、地上社)

座古の自伝から抜粋した文章数編に、中村による回想記「慈光に照らさる」を加えたもの。中村の回想記は他の中村の著作 (「こころの手足」〔1971、春秋社〕等) にも収録されている

中村久子 (1897-1968) は病により四肢を失い、苦しみの中で成人、見世物芸人と

して働いていた。1929（昭和4）年夏、雑誌『キング』の記事で座古のことを知り、神戸女学院の座古のもとを尋ねた。中村は自らも信仰を迫りし浄土真宗門徒となるが、キリスト者座古から「深い霊的感化を与え」（小川修、2005、22）られたという。

山口君子「神戸女学院と近代詩歌」『神戸女学院百年史 各論』（1981、神戸女学院百年史編集委員会編、神戸女学院）

『日本基督教団兵庫教会 100 年史物語 上巻』（1994、日本基督教団兵庫教会、下巻は未刊の模様）

小川修「十字架につけられし人 座古愛子覚書」『ルーテル学院研究紀要 テオロギア・ディアコニア No. 39』（2005、ルーテル学院大学）

ウェブサイト「日本キリスト教女性史（人物編）」 文筆活動に生きた女性たち 座古愛子（<http://www.5e.biglobe.ne.jp/~BCM27946/zakoaiko.html>）

本稿執筆にあたり、神戸女学院大学史料室の佐伯裕加恵様より、貴重な史料の閲覧させていただき等のご協力をいただきました。感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

1 『日本キリスト教歴史大事典』（1988、教文館）には座古愛子の項目があり、歌人として紹介されている。

2 以下に、座古の生涯に関して簡略に記しておく。

- ・ 1878（明治11）年12月生まれ、当時既に母は離婚（父の道楽癖に愛想をつかす）しており、再婚した相手が座古氏である。後に愛子が伝記を捧げる『父』とはこの座古九兵衛である
- ・ 母方の祖母、武井みつはキリスト者、兵庫教会（日本組合教会）会員であった。この祖母から聖書の物語を聞き、またその穏やかな人柄が信仰と関わりがあるということを感じていたようである
- ・ 幼少期、様々な苦難・困難があり、座古家は没落。家族は生活のため様々な仕事を体験し、苦勞を重ねる。愛子も何回か芸妓として奉公に出ようとするが、奉公先が実は娼家であって逃げ出す、といった経験が二度ある
- ・ 神戸多門教会の夜学で学び、読み書きを身につけている（このことはその後大きな意味を持つ）
- ・ 12歳のころ祖母、実母と死別
- ・ 16歳のころに悪性のリウマチにかかり、悪化、18歳のころから寝たきりに

- ・20歳の頃キリスト教と出会う（あるいは、祖母の教えがあったのだから、再会）
座古の扱いに関して養父母の争いがあり、そこで仲裁に入ったのが、座古家の裏で行われていた工事の監督をしていた、神戸教会（日本組合教会）会員の奥江清之助であった。これ以降、兵庫教会から祖母の知人たちによる見舞いがあったことをはじめとして、教会関係者が訪ねてくるようになる。また、聖書を読むように（夜学に通ったのが効いてくる）
- ・1898（明治31）年3月、21歳で兵庫教会、人見牧太牧師より受洗。ただし、寝たきりのため教会に行くのは困難であった。33年のクリスマスには寝床ごと担がれて兵庫教会の礼拝に参加している
神戸を去っていた奥江に受洗を報告すべく、手紙を書くためのリハビリを開始、字が書けるように
- ・座古の文才に注目した兵庫教会牧師武田猪平（人見の後任）が、病人への見舞いの手紙を書くことを勧め、さらに散文、韻文の執筆を勧める。和歌、俳句については武田を通して教会員が指導したという
- ・座古は手紙、雑誌への寄稿等様々な形で文書伝道を行うようになり、また病に苦しむキリスト者や求道者が座古のもとを訪ねてきたり、座古が彼らを訪問したり、といった関係がひろがっていくようになった
- ・大正期初め（1931年の文章で「神戸女学院に来て19年目」とあるので、1912年頃か？）より、神戸女学院（現在の校地、岡田山への移転前）の購買に住み込んで働くようになり、職員等と祈祷会を持ったほか、学生たちの精神的な指導者でもあったと思われる。座古はタルカット等女性宣教師と親しい交流があった。ただし、女学院へ行ったのはタルカットの死後である
- ・1933年ごろ神戸女学院が岡田山へ移転する際女学院を去ることになるが、その後の座古の1945年死去するまでの状況については、現時点でははっきりわからない
- ・1967年、中村久子のはたらきかけもあり、神戸女学院で有賀鉄太郎院長により追悼行事が行われる

以上の記述は、『伏屋の曙』『伏屋の曙 続編』中村久子『座古愛子女史の一生』『日本基督教団兵庫教会100年史物語 上巻』等による。なお座古の自伝的文章には、出来事に関して正確な年月が記されていないものが多いが、これは貧しい生活を送っていたために日々の生活を記録する日記のような手段が無かったからではないかと思われる。そのため、「いつ頃」という書き方にならざるを得ない面が多々ある。

3 例えば土肥昭夫はこの問題について、次のように述べている。

「従来刊行された各個教会史をみると、牧師の就任期間によって章を分けたものが少なくない。たしかに、各個教会において牧師が占める位置と果たす役割は大きい。しかし、教会は教職者と信徒が構成し、それぞれが固有の職務をになっているのである。」

「…教会は教職者と信徒によって動くのであるから、〇〇牧師時代という章の分け方は一面的といわざるを得ない。」土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史論』（1980、新教出版社）、44 ページ。

4 隅谷三喜男はこの問題について、次のように述べた。

「…日本の教会の姿に言い直せば、二階はカール・バルトやニーバー、トレルチ、更にはカルバンか女性解放の神学か、となる。勉強家の牧師であればあるほど、説教の準備にそうした著作を参考にし、頭に置いて、説教の核となる聖書の周辺を彩るのではないであろうか。…だが問題は、それが、日常的な営為の中で、信徒が悩み苦しんでいる所とどうつながるかである。」隅谷三喜男『日本の信徒の「神学」』（2004、日本キリスト教団出版局）、216-7 ページ。

5 たとえば古屋安雄は、この問題について次のように述べる。

「明治以来「平信徒」と呼ばれているうちに、伝道は牧師がするもので、一般信徒は牧師の説教をただ聞いているもの、という受け身的な姿勢ができてしまったのではないか。わが国のキリスト者が国民人口の一パーセント、約百万人をなかなか越えられないのは、牧師だけが伝道をしていて、信徒が伝道しないからである。」古屋安雄『日本のキリスト教』（2003、教文館）、27 ページ。

6 内村鑑三全集には全部で8か所、座古愛子に関する言及がある。それらによる限り、座古が内村の再臨運動を応援する手紙を送ったことが繋がりのはじまりとなったようである。内村は座古の著書『父』に序文を寄せ「霊の強きを以て体の弱きに勝ち得た人」「此世からして霊界の人たるの経験を有する最も恵まれたる人」（内村鑑三「座古愛子著『父』序文」『内村鑑三全集 25』、1982、岩波書店、221 ページ）と評したほか、「宗教と實際生活」では「身は不幸の極に居るも、顔は歓喜を以て輝く者」「病床に在りて彼女は人を指揮して社会改良を行ひます」（内村「宗教と實際生活」『全集 28』、1983、岩波書店、35 ページ）と、座古を高く評価している。

7 座古、「伏屋の曙」（1906、警醒社）、76-77 ページ。

8 同前、77 ページ。

9 座古、「伏屋の曙 続編」（1908、警醒社）、226 ページ。

10 同前、32-33 ページ。

11 同前、200-201 ページ。

12 前出「伏屋の曙」、71 ページ。

13 同前、73 ページ。

14 小川修「十字架につけられし人 座古愛子覚書」『ルーテル学院研究紀要 テオロギア・ディアコニア No. 39』（2005、ルーテル学院大学）、28 ページ。

15 同前。

16 前出「伏屋の曙」、4-5 ページ。

- 17 座古『闇より光へ』(1931、培文堂)、46 ページ。
18 同前、47 ページ。
19 同前、48 ページ。なおこれは内村鑑三の接木論にも似た論法である。仏教信仰がキリスト教の土台となりうると座古は考えたのであろうか。
20 前出「伏屋の曙」93 ページ。
21 同前、93-4 ページ。
22 同前、95 ページ。
23 座古、「面白き集会」『微光』(1925、培文堂)、1 ページ。
24 同前、2 ページ。
25 同前、4 ページ。
26 旅の途中、同じ客車に乗り合わせた人々に配布したとことを座古は記している。

「…妾は袋の中より禁酒問答てふトラクトを取り出し…時こそ善けれと宮庄兄（黒田姉の御舎弟）にトラクトの配布方を依頼すれば、承知とうなづきて一人ひとりに丁寧に挨拶して「同車の彼の婦人は御病気なれども、神様を信じて病床にも希望の生涯を送らるゝは、全くキリストの愛に居らるゝにて病苦も何も憂ひしむる事能はざる慰藉を持てる為にて世人の怪しとする所、此秘訣は基督教に來りて学ばざれば分らず。今諸君方と同車したるを幸ひに此トラクトを呈せんとなり、熟読なし給はゞ彼の姉妹は満足に思はるゝなり」(『伏屋の曙続編』62-63 ページ)

なお後には、車中の全員ではなく、選んで配布するようになっている。考え方に変化があったのであろうか。

「箱中を見まはして、読んで呉さうな人に丈、一錢五厘のトラクト十五部配附して、心中で祈つた。」(『微光』、50 ページ)

27 警醒歌

- 一 愛する日の本うるはしく 雲井にそびゆる富士の峯 白波きよけきちぬのうみ 濁る
は罪のふち
(折り返し)
目をさませ国のため 烏羽玉の夜は明けぬ 命の泉に身をあらひ 潔くなれかし皆人
二 罪のどろみづ世にあふれ 銀行倒れて富はさり 信用すたれてみだれゆく いたまし
きさまや
三 悪魔のてたての酒という 魂うばはれ家つぶれ 妻は病みふし子は飢うる いたまし
きさまや
四 学校生徒のストライキ 師弟の道さへくづればはて 国の礎ゆるぐなり いたましき
さまや
五 不義不徳はくにゝにみち 皇国を憂ふる人いづこ 見よや東洋のくにぐにを いたまし
きさまや

六 時は来たりぬいまや来たりぬ とく悔い改め主にたよれ イエスは皇国を潔めたまふ
来れはらからよ

28 福音数へ歌

ローマ 10:17 一ツとや 人々来りてヤソ教の 福音を 信じて話を聞き給へ 救はるゝ
創世記 3 二ツとや 二人の男女はアダムエバ 大神に 背きてみ国を追ひやられ さまよへり
サムエル上 16:7 三ツとや み姿見えねど力ある 神様は 心の底まで知り給ふ 恐ろしや
ローマ 6:23 四ツとや 愆より孕みし人の罪 いや増して 終には生命を失ふぞ 哀れなる
マルコ 8:34 五ツとや 如何なる難儀に会ふとても 主に任せ 十字架になひて世をわたれ
人々よ
エレミヤ 31:3、エフェソ 2:4 六ツとや 昔も今も変りなき 神の愛 深さも高さもはかられ
ず 感謝せよ
エフェソ 4:27 七ツとや なをざる心は罪の種 つとめよや 悪魔に處を得さするな 世の人
よ
申命記 10:18 八ツとや やもめと孤児やめるもの 憐みて 恵まば御神も其人を 愛で給ふ
ローマ 6:22 九ツとや 心の底より悔ゆるなら 潔められ 生命のかむりを受くるなり あり
がたや
コヘレト 5:10-16 十才とや 富も宝もつかのまに うするなり 救の光はかぎりなく 世を
照らす

29 「伏屋の曙」引用箇所は以下の通り。

詩篇 4:7、9:130、19:1、55:17、73:24, 25、103:2、103:13、104:33、119:18、119:67-71
マタイ伝 3:9、5:4、6:8、6:33、6:34、7:7、10:19, 20、10:32、10:38、13:23
ヨハネ伝 3:16、6:37、14:18、20:31
使徒 10:43、17:11 (7:11 とあるが、内容的に 17:11 と思われる)
ローマ 1:20、3:23, 24、4:6-7、4:24, 25、5:21、6:21, 22、6:23、8:5, 6、8:18、8:35-37、
10:9、11:31
第一コリント 1:18 第二コリント 6:2、7:1、7:4 フィリピ 4:6-7、4:11, 12 第二
テモテ 3:16
ヤコブ 1:12、5:15 第一ペトロ 1:18, 19 第一ヨハネ 1:7-9、3:16 第三ヨハネ 1:4

・以下は引用箇所が明らかに書かれていないもの

マタイ伝 5:30
ローマ 12:12

30 「伏屋の曙 続編」引用箇所は以下の通り。

創世記 30 出エジプト 28:3-6
ヨブ 5:23, 24、6:55、13:15、16:1, 2、35:10 (2回)
詩編 27:4、103:7、119:50、138:3 箴言 29:25

コヘレト 12:1

マタイ伝 4:1-11 ヨハネ伝 5:5-9、6:68、8:6-11、16:33

使徒 4:12、7:59-60、9:15、20:36, 37

第一コリント 1:26-29、13:8 第二コリント 1:3 ヘブル書 6:19、12:1, 2

第一ペトロ 3:1-4 第一ヨハネ 2:16-17

・ 以下は引用箇所が明らかに書かれていないもの（はっきりしないが恐らくここであろう、と判断される箇所を含む）

歴代誌下 13:5（塩の契約、あるいは民数 18:19 ?）

ヨブ 16:2

詩編 16:32、19:2

（エゼキエル 44:28 ? 「我れは汝の分汝の産業なり」）

マタイ伝 5:7（あるいは併行箇所）、6:3、6:27（併行）、7:7（併行）、21:9（併行）、27:45（併行）

ルカ伝 6:24、17:6、18:27 ヨハネ伝 5:8

使徒 3:6、9:15

ローマ 1:16、5:3, 4、13:8 第一コリント 2:16、7:29、9:2、15:10、15:19 エフェソ 4:1（二回）

フィリピ 1:21 ヤコブ 5:15（『熱き祈祷は病める者を癒す』）

第一ペトロ 1:8 第一ヨハネ 1:8、4:10（あるいはその前後）

・ 不明な箇所

『暴風怒涛は我頭上を往来し我が気力と健康と朋友とは去り、我喜びと幸福とは消滅すると
も我が靈魂は飽までも神に依頼せん』

「モーセの詩」とされているが、それらしい箇所が見当たらない

（いわの・ゆうすけ 関西学院大学神学部准教授）